

ルカによる福音書

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

祈りの内には選ばれる

ルカによる福音書 六章二二―一九節
沖村裕史

従っていた多くの人々の中から、イエスが二人の弟子を特別に選ばれました。まず、福音書の記述から、その弟子たちの姿をそれなりにイメージしてみましょう。

筆頭は、シモン・ペトロです。「ペトロ」は、イエスが名付けたあだ名で、ギリシア語で「岩」を意味します。頭の硬い頑固者というニュアンスが滲みます。二番目は、シモン・ペトロの兄弟アンデレ。この名前も「男らしい人」という意味です。筋肉質の大柄な人だったのか、喧嘩っ早い闘争心の強い人だったのか。ゼベダイの子らと呼ばれるヤコブとヨハネですが、マルコでは「ボアネルゲス」―「雷の子ら」とあだ名されています。怒りっぽくて、気性が激しい男たちだったのか。そのあだ名からすると、この四人はいずれも、頑固者、乱暴者で、できれば一緒にいたくない人たちに思えてきますが、彼が、一二弟子の中でも最も頻繁に聖書に登場する、弟子たちの中心的な存在となります。続く、フィリポとバルトロマイは、もとは洗礼者ヨハネの弟子だったようです。ちなみにフィリポはギリシア語で「馬好き」、軍人に好まれる名前です。次のマタイは、徴税人、ローマ帝国の手先。ユダヤで最も忌み嫌われた職業です。次の

トマスは、アラム語でデイデイモ、双子という意味です。ヨハネ福音書によれば、最後の最後まで疑い、問い続けた「躓き」の人です。アルファイの子ヤコブについては詳しいことはわかりません。続いて「熱心党」のシモン。「熱心党」は熱狂的な民族主義者のグループのこと、いわば過激派の一員です。続くヤコブの子ユダも影の薄い存在です。そして最後に挙げられているのが、あのイスカリオテのユダです。イスカリオテというのが、「カリオテ」という町出身の」という意味なのか、あるいは「シカリ派の」という意味なのか、議論の分かれるところです。シカリ派だとすれば、懐に短剣(シカ)を忍ばせて売国奴の暗殺を企てるテロリストの一員だったということになります。

イエスが選ばれた二人の弟子たちとは、頑固者や乱暴者だけでなく、忌み嫌われる徴税人がおり、またそんな人を売国奴として殺害しようとしていた過激派もいる、また軍人の家系らしき人もいれば、荒野で禁欲的な信仰に生きていた人も、最後の最後まで躓き続けた人もいる、そんなグループでした。そのような人たちが同じグループに属し、共なる歩みをするというのは、普通に考えればあり得ないことです。しかしそれこそが、イエスの弟子選びでした。さしたる共通項もなく、むしろ相反する性質を持ち、本来一緒に生きることのできないはずの者たち、互いにつづかり合いかねない者たちが結び合わされて、

一つにされて用いられる。そこに、二人の弟子の本質があるのだと言えるのではないのでしょうか。

その本質をよりはつきりと示すためにルカは、二人を弟子たちとして選び出すために、イエスは祈られた、と記します。冒頭「イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた」。二人を選ぶのに先立って、「神に祈って夜を明かされた」。口語訳では「夜を徹して神に祈られた」となっていました。これはマタイにもマルコにもない、ルカだけの言葉です。二人は、夜を徹するほどのイエスの祈りの内には選ばれたのだ、ということですが、それは、なぜだったのか。そのことを知る手がかりは、ルカが夜を徹して祈られるイエスの姿を描く、もうひとつの場面にあります。十字架につけられる前の夜の「ゲッセマネの祈り」です。「汗が血の滴るように地面に落ちた」と言われるほどの、あのゲッセマネの祈りと重なる祈りを、イエスは今ここで祈られている、そう申し上げてよいでしょう。二人の弟子たちを選ぶための祈りは、イエスが、「裏切り者となった」とあからさまに記される弟子たちの裏切りとその裏切りによってもたらされるご自分の十字架の死を受け入れられた、あのゲッセマネの祈りと同じ祈りであった、ということですが、そのような祈りの内には、二人の弟子たちが選ばれたということは、この選びが、弟子たちの罪が露わになる、十字架への道の出発点であったと言っただけでなく、その弟子たちが罪のままに受け入れられ、用いられることになるということ、躓きと裏切りを繰り返しながらも、主の赦しと導きによって何度も招かれ、何度も悔い改めて、新しいイスラエルたる教会の礎となるように用いられていく、その希望への道の出発点ともなったのだ、ということですが、

私たちもまた、そのような主の祈りの内には、選ばれ、招かれ、用いられることの幸いを深く思わずにはおられません。であればこそ、そのようにして選ばれ、立てられた弟子たちと共に、イエスが最初になされたことに目を留めなければなりません。それは、「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らなところにお立ちになった」とことです。山上で説教されるイエスを描くマタイとは対照的に、ルカのイエスは、山から下って、大勢の群衆の待ちかまえる平地に降り立って、神の言葉を語られます。ユダヤ全土から来た人々だけでなく、その人々から罪人と見なされていた、シドンやティルスに住む異邦の人々、病氣の人や汚れた霊に悩む人々、聖なる山の頂に行くことなどできない人々たちがそこにいました。しかも、今朝の聖書の箇所の後二〇節、山を下りたイエスが「目を上げて弟子たちを見て言われた」と書かれます。「目を上げて」と言うのですから、この時イエスは、弟子たちよりも低いところにいたことになり、平らなところよりもさらに低みに立って、弟子たちと人々を見上げて、イエスが語られる。イエスは、福音を高みに立って、この世から隔絶した聖なる場所に立って、選ばれた弟子たちだけに語って聞かせたのではない。この世のただ中で、私たちが生きている日常のあらゆる場所のただ中で、しかも私たちがよりも低いところに立って、身を低くして語られる。その場所から、神の国の到来を宣言され、神の愛の御手が今ここに備えられていることを示され、祝福を投げかけてくださるのです。まるで、あの十字架から語られたように、です。私たちは、深い悔い改めをもって、そのみ言葉を聞き取ることができているのでしょうか。

(二〇一八年一月一四日、
顕現後第二主日礼拝)